「放置竹林」解消、商品化探る

神戸の大学生ら、伐採後 食器や竹炭に

神戸市の企画で、放置竹林の伐採を体験する参加者たち＝神戸市須磨区多井畑

周囲に悪影響を及ぼす放置竹林が各地で問題となる中、神戸市内でも対策が本格化している。市が都市近郊の里山で伐採体験のイベントを開き、大学生らはプロジェクトを立ち上げて竹製品を商品化した。竹は成長が早い上、伐採にはコストと手間がかかる。対策の後押しには竹の使い道拡大も求められ、大量消費が期待できる堆肥への活用も研究が進んでいる。

（若林幹夫）

6月上旬、同市須磨区と垂水区にまたがる多井畑西地区の里山で、親子連れや高校生らがのこぎりを使って竹の伐採に挑戦した。

林業家の説明を受けて竹を切り倒すと、薄暗い竹林に光が差し込む。1時間半ほどかけて伐採できたのは約40本。家族4人で参加した同市須磨区のパート宮場亜理沙さん(36)は「近くにこんな生い茂った竹林があるのは驚き。切るのはけっこうな重労働ですね」と汗をぬぐった。

多井畑西地区はバブル崩壊後に宅地開発計画が頓挫。2020年に市が都市再生機構（UR）から無償で譲り受けたが、耕作放棄地に竹林が拡大していた。

生物多様性が失われ、タケノコを餌にするイノシシが増えるほか、土砂崩れの危険性も高まるため、市民団体が整備を続ける。市は22年度から年数回、身近な里山に放置竹林の問題があることを知ってもらおうと伐採体験を開いている。

■

伐採後の竹を山に置いたままだと景観を悪化させる。さらに時間がたつと分解し、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

官民で対策 大量消費へ堆肥化研究

ローカル+α

甲南大学では21年度から、学生たちが「Bambooに Thank you Project（バンブーにサンキュープロジェクト）」を展開。伐採だけでなく利活用策を検討する。

民間会社の協力を得て、3年間かけて竹ペレットを材料の一部に使った食器類を製品化。「こうべ竹太郎」と名付けて今年3月、神戸・東遊園地で開いたイベントで販売を始めた。

25年度は竹炭の商品化も模索。リーダーを務める経済学部3年の田中真幸さん(20)は「自分たちだけで解決は難しいが、活動を通じ問題にかかわる人たちをつなげる役割も担いたい」と話す。

■

放置竹林の拡大は、竹が建築資材や日用品として使われなくなったことが背景にある。神戸市によると市内で推計千㌧あり、年15㌧のペースで広がっている。

メンマやビールなど食材にも活用されるが、それほど多くはない。神戸学院大現代社会学部の菊川裕幸講師(36)は大量消費を目指し、堆肥に商品化する研究を進める。

昨年11月にゼミの学生と同市西区の竹林に入り、丸1日かけて伐採した竹をチップに加工。共同研究する兵庫県佐用町の牛ふん堆肥メーカー「近畿農産資材」に約1㌧を持ち込んだ。牛ふんと混ぜて約4カ月かけて発酵させ、今年5月に堆肥が完成した。

竹チップには水分調整の効果が期待できる。生育試験で効果を検証しており、順調にいけば年明けにはホームセンターなどの店頭に並ぶという。菊川さんは「少しでも収入につながれば、地域住民が持続的に伐採できるようになる。環境問題の解決につながる商品として付加価値がついてほしい」と期待している。

竹を使った堆肥（左）と素材の竹チップ＝神戸市中央区港島1、神戸学院大

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。